

第8回猪名川部会(2002.1.27開催) 一般からの意見聴取の概要(暫定版)

- (1) 日 時 : 2002年1月27(日) 13:30~15:45
- (2) 場 所 : 大阪国際会議場 12F 特別会議室
- (3) 参加者 : 委員 10名 一般傍聴者 57名
- (4) 主な発言内容

意見発表者7名を、前半4名、後半3名に分け1人7分で発言頂いた。また、前半・後半の後、委員から発表者への質疑応答を行った。最後に一般傍聴者3名から発言があった。

以下の発言については確認作業中ですので、今後、修正・変更の可能性あります。

はじめに(米山部会長)

- ・ 本日は前半に一般からの意見聴取を、後半に通常の会議ということで行いたい。
- ・ 前半の一般からの意見聴取の発表者の選出にあたっては、新聞広告など頂いた意見の中から部会委員の希望を主としながら、部会長、部会長代理で決定した。
- ・ 本日はここで何かを決めると言うわけではなく、それぞれの発表者の意見を承ると言う形で進め、それを今後の部会に反映させていきたいと考えている。
- ・ 後半の部で今日の会を今後どういうふうにつなげて行くかを委員で議論したい。

意見発表者からの意見

1. 流域全体のマスタープランの確立を

- ・ 流域全体で治水、利水、環境の多面的な管理や保全をすることが望ましく、流域の土地利用を含めたマスタープランの確立が重要である。
- ・ マスタープランには治水、利水、環境といった機能面だけでなく、上流、中流、下流といった地域的な視点が必要である。
- ・ 人口の減少期を目前に控えた今、財政的な負担能力の限界を考慮して、維持管理経費を念頭に置いた効果的で効率的な整備のためのシステムを検討すべき。例えば、住民、行政、企業の間で維持管理の機能を分担するといった議論をしてみてもどうか。
- ・ 今後も継続的に住民と行政が議論し合える場、意見を述べ合える場が必要である。
- ・ 河川整備によって利益を受ける人が管理維持費用を負担するといった受益者負担的な考え方を取り入れてゆく必要があるのではないか。

2. 優先順位を討議することが流域委員会の課題である

- ・ 流域委員会において、治水、利水、環境にとどまらない多様な討議を行うことは重要だが、TPOに応じて、必ず優先順位がある。この優先順位を討議し決定するのが、この流域委員会の最大の課題だと考える。

- ・人間は危険に近づきすぎてしまった。それにも関わらず、都市住民の洪水への危機意識は著しく低下している。洪水の恐ろしさ、水害の悲惨さを忘れてはいないだろうか。
- ・「ダムは不要だ」「治水を語るのはもう古い」といった論調とそれを喝采するマスコミによって、サイレントマジョリティの声がかき消されているのではないかと危惧している。

Q：具体的には、どのような優先順位を考えられておられますか。（委員）

A：治水、利水、環境は平等だと思っています。ただ、場所によっては治水が大切なところがあるでしょうし、環境が大切なところがあるでしょう。優先順位はTPOに応じて考えるべきです。（意見発表者）

A：私もそう思います。やはり、各論が大事だと思います。例えば、河川敷にある森は全部切ってしまうべきだと思います。自然の河川にはあれほど大きなヤナギの木は育ちません。ただ、疎通能力を損なわないところは残して置いたらいいと思います。（意見発表者）

3. 水と親しめる川づくり

- ・子供たちにとって川が遠い存在になってしまったこと、近寄ってはならない危険なものとして教えられていることが問題点だと考える。
- ・スーパー堤防等の拡充を進めてより一層安全な河川にしてゆく必要はあるが、教育や啓発といったソフト面に力を注ぐ時期が来たのではないか。
- ・子供が素足で水辺に降りても安心な川、アユが釣れる水質、釣った魚が食べられる川を目指した川づくりを。
- ・舟運のための対策を。緊急用を含め、淀川大堰に船の通れる水門を設けてはどうか。

4. 余野川ダムの必要性について、様々な議論を

- ・余野川ダムの基本高水量は大きすぎるのではないか。
- ・余野川の流域面積、流量ともに大きくないので、猪名川本川に対する余野川ダムの治水効果はそれほど高くないのではないか。
- ・出水時に浮遊流下する落葉落枝による水質悪化、上流域の田畑と「水と緑の健康都市」の造成地の赤土による水質汚濁が懸念される。
- ・川の自然を維持するためには、平時において水の流れない乾いた陸地を冠水させる必要がある。
- ・環境へのインパクトも非常に大きいこのダムの必要性について、財政面も含めて、様々な角度から深い議論を期待したい。

Q：猪名川には多田地区の狭窄部の問題があります。この狭窄部を開削すれば、多田地区の浸水被害は低減しますが、下流域での危険が増してしまいます。そういった総合治水の

観点から、余野川ダムの必要性をどう考えておられますか。（委員）

A：土地利用の規制が行われず、人間が危険に近づきすぎてしまった典型的な例だと思います。正直、どうすればいいのか、わかりません。コストから考えれば、大規模な治水工事をするよりは、家を全て買い上げた方が安いのではないかと思います。（意見発表者）

Q：余野川ダムが不要な理由を一言で言うとしたら、どうなるでしょうか。（委員）

A：日本に財政的な余裕がないからではないでしょうか。あと、利水の問題です。大阪には水が余っているわけです。こんな小さな川に大きなダムは不要だと思います。私はダム否定派ではないのですが、このダムに関してはあまりにも効率が悪すぎます。（意見発表者）

A：大阪の一人あたりの水使用量は極めて大きいのです。この生活態度を直さなければいけないと思います。（意見発表者）

5. 「山林に植樹すれば、ダムは不要だ」という意見について

- ・山林に植樹すれば、浸透する降雨の量は増加する。しかし第7回猪名川部会でも報告されたように、ある一定の降雨量以上になれば、山林の保水能力は飽和してしまい、雨はそのまま流出してしまう。
- ・日本の河川の多くは中・下流域が市街地になっており、破堤等が発生すれば大変な被害が発生する。私の友人も昭和35年と昭和42年に洪水の被害を受けており、その状況はまさに悲惨だった。
- ・中・下流部の市街地を洪水から守るためには、上流部において「ダム」を設けて流量を調整する必要がある。また、異常湧水への備えとしても「ダム」は必要である。
- ・自然環境を保全することは重要だが、洪水によって人命が失われることは避けねばならない。人間が安全に生活できてはじめて自然と親しめるのではないだろうか。
- ・余野川ダムでは環境保全を考慮して、その開発区域からオオタカの生息地域がはずされた。新しいダム開発技術の導入等によって、自然や生物との共存型ダムを作ることは可能だと思われる。

Q：猪名川部会では、今後どれくらいの洪水を基準にして整備してゆけばいいか、議論をしています。もしよければ、御意見をお聞かせ下さい。（委員）

A：過去最大の洪水を基準にすればいいのではないのでしょうか。自然が大切なのは分かりますが、やはり、人間の命あっての自然だと思います。（意見発表者）

Q：治水と環境のバランスをどうとって、新しい河川管理の総合的なあり方を考えていくべきか、悩んでいます。そこで、お伺いしたいのですが、なぜ治水を重視されているのでしょうか。一言で言うとしたら、どうなるでしょうか。（委員）

A：やはり、洪水の実体験です。ひどい臭いですし、部屋の中は本当にもうむちゃくちゃなのです。洪水を経験した者としては、やはり河川改修を進めて欲しいと強く思います。（意見発表者）

6. 猪名川、藻川への思い

- ・戦後、猪名川、藻川の河川改修が進んだことで洪水の脅威は薄れつつあるが、同時に住民の洪水に対する危機意識も低下している。感謝の日などを設けて、防災への心構えを喚起し高めていかなければならない。
- ・猪名川の最下流域である尼崎では、河川敷が最高度に利用されている。今後は、市民の憩いの場、子供たちの環境教育の場として、環境改善のためのビオトープ作りや、野草、宿根草や低木のある「花の咲く堤」作りによって、多くの自然、緑を残してゆくことも大切である。
- ・島の内（猪名川、藻川に囲まれた地域）全域の堤防で、車の乗り入れを禁止し、市民が安心してウォーキング、ジョギングを楽しめるように配慮した堤防作りを望む。

Q：市民の憩いのために河川敷にチューリップや桜を植えることに対して、川らしい自然を壊す行為だという意見があります。どう思われますか。（委員）

A：市民の強い要望もありますし、市民に喜びを与えるという観点からも、許される範囲で考えていけばいいのではないかと思います。現在、高水敷は子どもたちが利用していますが、低水敷については、市民との協議のもとで自然のままに放置状態にしておけば、生物が棲める環境ができあがっていくのではないのでしょうか。（意見発表者）

7. 土道の堤防を子どもたちのために残したい

- ・「私たちが川の堤防を散歩道として親しむ理由は、美しい川の流れ、その流れに背びれを光らせて泳ぐ魚の群、そしてその魚を求めて群れる水鳥や釣り人ののどかな姿、河川敷で群れて遊ぶ子どもたち、土手の草むらで鳴くキリギリスやコオロギの声、その虫を求めて遊ぶ子どもたち、そして、アスファルトに慣らされた足には、なつかしい土の感触...これを求めるからではないのでしょうか。」
- ・昭和 58 年、藻川の堤防がアスファルトのサイクリングロードになるという話があったおりに署名活動を行って土道による整備を要求し（上記一文はその陳情文から抜粋）、土のまま保存してもらうことになりました。平成 10 年には、土ぼこりがひどいので舗装して欲しいという地元住民の要望に対して、改めて「土道を愛する会」を作って現在も活動を続けています。
- ・尼崎は平地ばかりの街です。川が唯一の自然なのです。この自然を失うと、子どもたちは自然を知らないまま育っていきます。川端康成の文章に「虫が鳴いている」というものがあります。虫と言えば、皆さんはコオロギやスズムシを連想されるでしょう。しかし、自然を失った子どもたちは「虫の声」を知ることができません。
- ・「100 年に一度の洪水のために、アスファルトが必要なんだよ」という意見もわかりません。しかし、100 年に一度の洪水のためにどれだけの自然を失わなければならないのでしょうか。堤防や河川敷がどうあるべきかは、今後どんな社会が訪れるのか想定して考

えてゆかばならないと思うのです。

Q：治水も大事だけれど、なによりも自然が大切なのだという理由を、一言でお願いできますか。（委員）

A：子どもたちは自然を失いつつあります。私は教師なのですが、自然の中で暮らしてはじめて本当の意味で自然教育ができるのではないかと考えています。洪水に対しては、被害をゼロにすることを考えるよりも、最低限被害を少なくして、人の命を守ってゆくことはできないのか、と考えています。（意見発表者）

Q：例えば、貯水池の周囲に遊歩道を設置するとその維持管理が必要になってきます。猪名川では、そういった維持管理を行うための、NPOやNGO、婦人会などのネットワークのようなものがあるのでしょうか。（委員）

A：維持管理を実施していくのはやはり役所ではないでしょうか。役所の中で理解してくれる人がどれだけいるかにかかっていると思います。役所と市民が話し合っていてやっていくのが、一番ではないかと考えています。（意見発表者）

一般傍聴者の意見

- ・余野川ダムでは、猪名川の総合治水対策を実現できないのではないかと。多田地区の浸水に対して効果があるようには思えない。
- ・旧建設省が余野川ダムの代替案をいくつか示している。猪名川流域全体を考えれば、余野川ダムよりも、これらの代替案の方がより効果的ではないか。
- ・100年に一度の雨に備えるため、大阪空港の広い敷地に遊水池機能を持たせてはどうか。
- ・ダムが必要か否かについて、例えば、水需要や計画高水量の算定が合理性を有しているのか、どのようなシミュレーションモデルを用いて算出されたのか、公表して、それを検証すべきである
- ・欧米での河川整備はダム撤去や再自然化という方向に向かっている。国土交通省の河川審議会の答申にも、水を川に閉じ込めない治水のあり方を検討すべきだとなっている。今後は、まず治水の必要性があるのかどうかを検討し、必要があるならば、様々な代替案を示して、民主的に検討して頂きたい。
- ・治水について、土地利用との関係を十分に配慮して計画を立てて頂きたい。また、ダムによる高水調節には、時間的な調節機能も備わっていると思われるので、こちらも配慮した計画をお願いしたい。
- ・環境については、動物であれば動物の、植物であれば植物の環境指標を設定した上で議論して頂きたいと思う。